

緒 言

国立大学の文系は死に瀕しています。昨年6月、文部科学大臣が全国の国立大学に向けて、人文社会科学系および教員養成系の学部・大学院は、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう求める通達を出したからです。乱暴極まる要請ですが、即座に反発した大学はごくわずかで、大半が理系、その多くが医学部出身の学長たちはほとんど黙っていました。それでもメディアを通じて識者や一般市民から反対の声が上がりました。3か月ほど経った9月になって、様子見をしていた経団連が、世論を無視できなくなって、文系軽視は経済界の望むところの対極にあるという意味の声明を出しました。喜んでもらえると思っていた文科省は大慌てで通達の受け取られ方に誤解があったと釈明しましたが、通達自体は撤回していません。テレビのニュース番組で文科省の役人が「文系学部は改革に熱心でないからだ。改革をしっかりとやらない分野はいらないのだ」と言っていたのを覚えています。つまり、役所の言うことを聞かないから文系は切り捨てると言うのです。文系の学問は科学技術を扱う理工系とは違って、その時々「社会的要請」などによって変えるべきものではありません。芭蕉は俳諧の本質に「不易」と「流行」があると説きましたが、学問の世界では、「不易」を重視するのが文系なのです。変えてはならないから変えない。しかし国はそれを許しません。実は改革云々よりも、文系の学問の根底にある批判精神が嫌なのではないかと勘ぐりたくなります。

国立大学が法人化して12年が経ちましたが、研究環境の悪化はとどまるところを知りません。毎年1パーセントの予算削減が続いていますからすでに1割以上の予算が減られました。当然人員も削減され、教育に支障が出るころまで来ています。兵糧攻めも辛いですが、現政権になってからは最も尊重されるべき「大学の自治」や「学問の自由」をどんどん奪っていきます。学長に権力を集中させ、教授会の権限を極端に縮小しました。学長は選挙ではなく、少数の役員による会議で選び、教授会は学長どころか学部長や研究科長も自由に選べなくなりました。あろうことか部局の人事権も奪い、すべての人事を学長と役員会が掌握することになったのです。あらゆる決定がトップダウンで行われ、下々の者は上の意向に従うしかないので。なんとも恐ろしい時代になったものです。

こうなったからには、我々はとにかく高い見識の持ち主が学長になってくれることを祈るしかありません。就任のいきさつや大学運営の方針について、各部局に顔を出して肉声で説明して信任を得る努力をし、人徳で構成員の心をつかむような人物であってほしいものです。口を開けば叱咤激励、世界トップ100をめざして成果を上げよ、成果が上がらない部局は研究費を削るぞ、能力のない者は給料を減らすぞなどと言う前に、成果が上がるべく研究環境を良くするために学長としてどんな施策を講じるのかを具体的に示せる人でないと困ります。万が一、部局が推薦した部局長候補者が気に入らないからと承認をいたずらに遅らせて権力を誇示するような人だったら、文系も理系も関係なく、大学全体にとって不幸です。広島大学に限ってよもやそんなことはないでしょうけれど。

内海文化や厳島の研究を発展的に継続できるかどうか学長のお心次第です。頼りにしています。

平成28年3月

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設

施設長 妹 尾 好 信

目 次

緒 言

岩国市中央図書館所蔵和装図書目録稿(5)

—文学の部（前半）—……………妹 尾 好 信…… 1

山口県文書館蔵「近藤芳樹日記」翻刻（十一）……………久保田 啓 一……（35）

〈資料翻刻〉永代美知代「デツカンシヨ」(1)

……………有元 伸子・板倉 大貴・ダルミ・カタリン……（19）

萬田 慶太・熊尾 紗耶

備後国「看度（者度）」駅について……………西別府 元 日……（1）

（ ）は縦組で裏表紙から

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設研究紀要投稿・執筆要項

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設細則

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設運営委員および研究員（平成27年度）